

氏名(本籍)	おう	たん	たん	王 丹 丹 (中 国)
学位の種類	博 士 (言 語 学)			
学位記番号	博 甲 第 5889 号			
学位授与年月日	平成 23 年 7 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人文社会科学研究科			
学位論文題目	<b>pro-脱落言語におけるゼロ要素の統語的分析</b> —日本語と中国語を中心に—			
主	査	筑波大学教授	Ph.D. (言語学)	竹 沢 幸 一
副	査	筑波大学教授	博士 (言語学)	杉 本 武
副	査	筑波大学教授	博士 (言語学)	沼 田 善 子
副	査	筑波大学准教授	Ph.D. (言語学)	宮 本 エジソン 正
副	査	筑波大学准教授		佐々木 勲 人

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語と中国語のコントロール構文を研究対象とし、その補文内に見られるコントロールされるゼロ要素と任意の解釈をもつゼロ要素の統語的分布と意味解釈を決定するメカニズムを生成文法理論に基づいて考察したものである。

具体的に本論文で取り上げられるのは、(1) の英語のコントロール構文に対応する (2) の日本語と (3) の中国語の構文、またそれに関連する諸構文である。

- (1) a. John intends [ $\phi$  to go to Paris]  
 b. [ $\phi$  Smoking] is harmful
- (2) a. 太郎が [ $\phi$  パリに行く] つもりだ  
 b. [ $\phi$  タバコを吸うのは] 有害だ
- (3) a. 张三 打算 [ $\phi$  去 巴黎]  
 张三 つもりだ 行く パリ  
 b. [ $\phi$  抽 烟] 有害  
 吸う タバコ 有害だ

こうしたコントロール構文の研究において特に重要な問題は、埋め込み節に存在すると考えられる空主語  $\phi$  の統語的認可とその指示内容の決定のためのメカニズムである。空主語の意味解釈に関しては、三言語とも a 文では主節主語と同一指示を持つ義務的コントロールの解釈を受けるのに対して、b 文では特定の人を指示するのではなく、人一般に関する任意の解釈を持つ。他方、そうした空主語の現れる統語環境を見てみると、英語では不定形節（不定詞節・分詞節）であるのに対して、日本語では時制辞を含む定形節となっており、また動詞形態の屈折を持たない中国語では、一見したところ、それが定形節なのか不定形節なのか区別がつかない。

本論文の主目的は、日本語と中国語における上記のコントロールされるゼロ要素および任意の解釈をもつ

ゼロ要素の文法的正体とは一体何なのか、またそれらはどのような統語的環境の中で認可され、またどのように意味解釈が付与されるのかという問題を究明することである。

本論文は全7章から構成される。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、本論文の研究対象、研究目的および論文構成について述べる。

第2章では、本論文の研究背景であるコントロール構文に関する先行研究の流れを概観し、先行研究の問題点を指摘しながら、本論文で行う議論との関連を示す。

第3章では、中国語におけるコントロールされるゼロ要素について考察を行う。まず中国語には、英語と同様に定形節と不定形節の区別があることを示すとともに、中国語のコントロール補文は定形節の場合と不定形節の場合の二種類が存在することを指摘する。さらに、バルカン諸語等に見られる定形コントロール補文の空主語はPROであるというLandau (2004)の問題点を指摘し、中国語には“自己・他自己”といった再帰代名詞に対応するゼロ形の照応詞が存在し、中国語の定形コントロール補文の空主語は、PROではなくproとしての指定を持つゼロ照応詞として分析すべきであることを論ずる。

第4章では、日本語における時制辞を含むコントロール補文について考察する。まず、先行研究の問題点を指摘し、日本語における時制辞を含むコントロール補文が定形節として分析されるべきであることを論じる。次に、日本語にも中国語同様にゼロ形の照応詞があることを示す。その上で、日本語の定形コントロール補文における空主語はPROとしてよりも、「自分・彼自身」といった再帰代名詞に対応するゼロ照応詞としての統語的資格を有することを示す。その後、第3章、第4章の議論を踏まえてproの統語的特徴について考察を行い、proには「代名詞的pro」と「照応的pro」の二種類があることを提案する。

第5章では、日本語と中国語における任意の解釈をもつゼロ要素について考察する。日本語と中国語の任意の解釈をもつ空主語はPROではなく、任意の人を表わす総称代名詞「人」・“人(ren)”に対応するproであることを主張する。また、日本語と中国語では、任意の解釈をもつ要素は目的語位置では常に顕在的に出現しなければならないが、主語位置では顕在的ではなく、ゼロ形式として出現するという非対称現象の存在を指摘し、このような非対称性が生じる理由について説明を与える。

第6章では、第3章から第5章までの議論を踏まえ、空範疇分類におけるPROとproの位置づけについて再考する。まず、PROとproはそれぞれ異なる性質を有するゼロ要素であるというChomsky (1981)の問題点を指摘し、PROとproはその先行詞の決定に関して同じ性質をもつ空範疇であることを論じる。次に、PROをNP-痕跡に併合しようとするHornstein (1999, 2003)等の分析が妥当ではないことを示す。最終的には、空範疇は四種類ではなく、三種類にまとめられることを主張する。

第7章では、本論文のまとめと今後の課題について述べる。

## 審査の結果の要旨

生成文法において、外的な音声刺激に依存しないゼロ要素の存在は生得的な言語知識の解明に深く関わりと考えられており、統語表示上は存在するものの、音声実体を持たないPRO・pro・痕跡等の空範疇に関する研究は統語理論構築のために非常に重要な位置づけを担ってきた。本論文は、他言語と比較してかなり自由に項名詞句の省略を許す日本語と中国語の分析を通して、コントロール構文の補文主語位置に現れる空範疇の特徴およびその統語的認可と意味解釈の方法、さらには空範疇の分類のあり方に新しい観点から迫ろうとした非常に意欲的な研究である。

日本語および中国語のコントロール構文に関するこれまでの研究は、基本的に英語に対して提案されている分析を踏襲したものが多く、コントロール補文は英語の不定詞節に相当し、一般的なコントロール理論であれば、その主語位置はPROによって、またHornstein流の移動分析であれば、NP痕跡によって占められ

ているといった主張が主に行われてきた。本論文は、日本語と中国語のコントロール構文には、英語の場合と異なり、補文が定形節の統語的特徴を有するものが存在するという基本的な観察からスタートし、語彙主語の顕在的な出現等の事実を指摘しながら、日中両語における定形コントロール補文には PRO ではなく、pro が関与しているという新たな提案を行っている。また、日本語と中国語の定形コントロール補文主語が pro であるという分析を、その統語的分布の説明とともに指示解釈の問題にも適用し、顕在的な「自分・彼自身」、「自己・他自己」といった照応詞や「人」・“人 (ren)” といった総称代名詞との対応関係を示しながら、「照応的 pro」の存在を論証している点は、日中両語のコントロール現象の説明のみならず、普遍文法における空範疇の分類とその体系化に対しても非常に重要な貢献となっている。

特に、著者は日本語と中国語が共有する「一致を要求しないラディカルな pro-脱落」と「定形節補文内へのコントロール」という二つの基本的な特徴を重視しながら、両言語のコントロール現象に説明を与える一方で、両言語の扱いを英語等の非 pro-脱落言語やイタリア語等の一致を条件とした pro-脱落言語での説明から切り離すのではなく、空範疇の種類と節のタイプの違いによってそれらの言語の共通点と相違点が明確になるような形で説明を与えている点は非常に高く評価される。

もちろん、ゼロ要素の統語的・意味的役割に関わる根本的な問題を扱っている研究であるが故に、いくつかの重要な問題も残されている。特に中国語の定形節と不定形節の区別については、古くから中国語学において議論されてきた問題であり、本論文でも一章を割いて議論を行っているものの、さらに詳しい検討が必要であろう。またそれと関連して、時制による動詞形態の屈折の有無に関して中国語と日本語ではまったく異なっており、この違いが定形節と不定形節の区別にどう関わるかはコントロール以外の現象にも観察の範囲を広げて考察していく必要がある。さらに、総称代名詞のゼロ形と顕在形の非対称性に関する議論は、文法内の問題としての分析だけでなく、語用論的知識との関連性をも見渡した研究の必要性を示唆している。しかし、こうした問題は今後の更なる研究を推進するための駆動力ともなる生産的なものであって、むしろ歓迎すべき課題とすることができる。

平成 23 年 5 月 11 日、人文社会科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。